



「イクのか、

逝かないのか、

どっちなの!？」

お師匠様とあたしたちの、  
いけないスライム退治

【スライムの苗床♡ 破裂アワメ♡】

【オルガ・ファンタジー】シリーズ

魔力（オルガ）を狙われ、肉体の奥底まで犯され尽くす  
絶望と凌辱のハードエロス・ダークファンタジー

著：XYZ\_L

# お師匠様とあたしたちの いけないスライム退治



魔力（オルガ）を狙われ、肉体の奥底まで犯され尽くす  
絶望と凌辱のハードエロス・ダークファンタジー  
「オルガ・ファンタジー」シリーズ

著:XYZ\_L

## 序章:招かれざる魔物

リンドブルム村は数十年前の古き魔女による大規模な魔法災害から復興し、平和を取り戻しつつあった。

しかしその災害の痕跡である「蝕む森」は、未だに人々の生活を脅かす禁忌の地として横たわっている。

古い伝承では魔女たちが己の力を競い合い、その暴走が森を忌まわしい姿へ変貌させたとされる。

しかし真実を知る者はいない。

「あれは遠い昔、高度な技術を持ったエルフたちが遺した生体兵器の暴走だ」と囁く者もいた。

ただ1つ確かなのは、森の奥深くで今もなお、禍々しい魔力が蠢いているという事実だけだった。

ある日、若い娘が森で消息を絶った。

搜索に当たった村の男たちは古代遺跡の洞窟で、正視に耐えない地獄絵図を目の当たりにする。

冷たい岩肌に、むせ返るような生温かい血と羊水の匂いが充満していた。

横たわる女性の肉体から、異常な熱量を帯びた無色の粘液が蠢きながら這い出してきた。

それはただの粘体ではない。

明確な生存戦略を持って人間の肉体を苗床とする、おぞましいスライムの群れだった。

村人たちはこの事態を解決するため、外界から高名な魔女を招くことを決意した。

この世界で魔法という規格外のエネルギーを自在に操れるのは、強大な魂の魔力——オルガエネルギーを内包する女性、すなわち魔女のみだ。

過去の災害が魔女の力によるものだと知っていながらも、他に頼る術がない彼らにとってそれは唯一の選択肢だった。



## 第一章:特級指定魔女

湿気を含んだ淀んだ風が、忌まわしい森の奥から吹き抜けてきた。

村の依頼を受けた王都魔導院の特級指定魔女ユスティナは、古代遺跡の洞窟を前にして不快そうに目を細めた。

村の男たちは「大量のおぞましいスライムが這い出してきた」と恐慌状態で報告していたが、今、彼女の視界に目立った魔物の群れは見当たらない。

あるのはただ、冷え切った岩肌に不釣り合いな、むせ返るような異常な瘴気と、空間にへばりつく微小な魔力流体の痕跡だけだった。

30代半ばを迎えたユスティナの成熟した肉体は、ただそこに立つだけで周囲の空気を陽炎のように歪ませていた。

内包された膨大なオルガエネルギーが常人の器に収まりきらず、常に肌の表面から魂の魔力の氾濫を起こしている。

行き場を失った力は微かな熱と汗となって滲み出し、発情した雌のような濃密な匂いとなって漂い、森の腐臭すらも塗り潰していく。

長身の彼女が歩みを進めるたび、視界を圧するほどに巨大で豊満な双丘が重々しく揺れた。

極限までくびれた腰から連なる艶めかしい骨盤の広がり、引き締まった脚のラインが、圧倒的な雌の質量を見せつける。

纏っている深いスリットの入った黒いローブは、溢れ出る莫大な魔力を散らすための魔術的な排熱機構だ。

歩くたびにしなやかな太ももが露わになるその姿には、己の強大さに対する絶対的な自信と、女王のような傲慢さが満ちていた。

「リディア、セシル。報告にあった下級スライムの群れではないわ。対魔の結界を限界まで固めなさい」

背後を付き従うセシルは、凜とした表情で師の言葉に頷いた。

ユスティナに比べれば小柄な体躯だが、日々の厳しい鍛錬によって腹部には無駄な脂肪がなく、すっきりと引き締まっている。

形の良い控えめな胸とすらりとした手足が、動きを阻害しない短めの特注ローブの下で健康的な色気を放っていた。

「は、はいっ……！」

対照的に、リディアの焦ったような甘い吐息が響く。

蜂蜜色の長い髪をふわりと揺らした彼女は、セシルよりもさらに背が低い。

しかしその胸元にははち切れんばかりの豊かな双丘を抱え、腰回りは皮下脂肪の多い柔らかな肉付きで、ゆったりとしたローブを内側から押し上げるようにたおやかな曲線を描いていた。

彼女たち二人の秘部には、魔力を抽出するための専用魔導器『オルガデバイス』が深く宛がわれている。

それは女性の最奥への直接的な快感刺激をトリガーとして、体内の魔力を安全に体外へ引き出す、いわば魔法の杖である。

強大な魔力の負荷で生身の肉体が焼き切れないよう、適切な刺激と抽出を管理する必須の安全兵装だ。

歩くたびに秘部へ食い込む無機質な機械の感触が、彼女たちに魔女としての緊張感を強めている。

しかし、ユスティナの股間にその安全装置はない。

彼女はデバイスという外部の抽出器を持たない、剥き出しの生きた魔力炉だった。

杖による刺激など必要とせず、己の強靱な意志と結界のみで膨大な魔力をねじ伏せる。

その規格外の力業こそが、特級指定魔女たる彼女の誇りだった。

その傲慢とも言える無防備さが、これから待ち受ける未知の侵蝕に対して、いかに致命的な欠陥であるか。

絶対の自信に満ちた彼女は、まだ知る由もなかった。

## 第二章:未知なる侵蝕

洞窟の入り口に足を踏み入れた瞬間、ユスティナは足を止めた。

冷え切った岩肌に不釣り合いな、甘ったるい発情の匂いが濃密に漂っている。

空間に残留する生々しい性的な魔力の痕跡を感知し、彼女の端正な顔がわずかに陰を帯びた。

古代の文献に記されていた、魔力そのものを喰らい尽くす幻の亜種「リビドー・ドローン」。

それがこの異様な空間の正体だった。

「お前たちは、この洞窟の入り口で待機していなさい」

背後の弟子たちへ、油断なく告げた。

「この魔物は下級なスライムとはわけが違う。封魔の結界を最深層まで固めなさい。そして、決して私の後を追ってはならないわ」



言い残すと同時、ユスティナは自らの身体を強大な魔力の結界で覆った。

外部からの物理的干渉や低級な魔法を完全に弾き返す、不可視の重装甲。

二人の弟子を外に残し、ユスティナは単身で暗闇の奥へと足を踏み入れた。

むき出しの自然な岩肌は、深部へ進むにつれて徐々にその姿を変えていった。

やがて周囲は、かつての高度な文明を思わせる幾何学的な構造物へと変貌する。

遠い昔に滅びたエルフたちが遺した、冷たく無機質な生体兵器の遺構だ。

空間には不気味な静寂が落ちており、遠くで響く水滴の音と、彼女自身の規則正しい靴音だけが冷たい壁面に反響している。

一切の光源がない完全な暗闇の中を、彼女は自身の肉体から溢れ出る魂の魔力の残光だけを頼りに進んでいった。

展開された強大な防壁は、遺跡の淀んだ冷氣も、空間に残留する有毒な瘴気も完璧に遮断している。

時折、濃密な魔力の残滓が結界の表面にへばりつき、微かな火花を散らして弾け飛んだ。

ユスティナは白魚のような指先を軽く宙に添え、視線をゆっくりと巡らせる。

杖を持たずとも、その優雅な所作の端々に特級魔女としての隙のない警戒が満ちていた。

しばらく進むと、村の男たちが犠牲者を発見したであろう開けた空間へと到達する。

だが、視界のどこにも「スライムの群れ」の姿はなかった。

あるのはただ、冷え切った人工的な床材にこびりついた、生々しい戦闘と捕食の痕跡だけだ。

（……魔力探知の網を広げても、不自然なほど何も引っかからない。完全に気配を消しているわね）

死に絶えたような古代の実験場。

自らの防壁への自信と共に、彼女がさらに一步、無機質な床板を踏み締めた時だった。

不意に、足元へわずかな違和感が走った。

分厚い靴底越しであるにもかかわらず、素足が直接ぬるりとした粘液を踏み抜いたような、極めて生理的で不快な感触。

反射的に視線を落としたが、そこには何も無い。

（……気のせい？ いえ、この生々しい魔力の痕跡は……！）

直後、全身の産毛が総毛立った。

足元に触れた「それ」は物理的な粘体を捨て、微小な魔力流体となって彼女の生体魔力経路へ同調していたのだ。

魔導器という抽出の杖を持たない彼女の肉体は、魔力の流れに対して魔術的な隔離機構を持たない、剥き出しの魂の回路そのものだった。

足先から侵入したこのような冷気が、溢れ出る魔力の波を恐ろしい速度で逆流していく。

「.....な、に.....これ.....っ」

ユスティナの脳裏に、初めての未知に対する得体の知れない恐怖が芽生えた。

だが、防壁を再構築するより早く、魔力の脈動に相乗りした冷たい流体は瞬く間に彼女の力の源泉へと到達する。

そして身体の最奥——子宮の入り口に、一粒の無色透明なゼリー状の異物として実体化した。

下腹部の奥底で、わずかな疼きが弾けた。

「あっ.....んっ.....！？」

それは彼女がオルガエネルギーを限界まで活性化させる際に伴う、神経が焼き切れるような快感に酷似していた。

しかし今は、その熱が彼女の意志を完全に無視し、明確な侵略の意図を持って内臓を撫で回してくる。

ゼリー状の異物は彼女の異常な体温と魔力に触れた瞬間、氷のような冷たさから一転、煮え滾るような高熱の粘体へと変貌した。

急速に質量を増したそれは無数の微細な触手を生やし、子宮の柔らかな内壁へと隙間なく吸い付いていく。

ただ無作為に魔力を吸うのではない。

この知的な捕食者は、魔女の最も敏感な知覚神経の結節点を正確にハックしていた。

微細な触手が脈打つように収縮と膨張を繰り返し、ぬるぬるとした粘液を擦りつけながら、計算され尽くした極上の蠕動で内壁を這い回る。

「ひ、あぁっ……！ こんな……下等な粘体に……私の、魔力が……っ！」

（かつて上位の淫星獣すら己の力のみでねじ伏せた私が……こんな粘体の発情具にされるというの……！？）





同じ頃。

洞窟の入り口で待機していたセシルとリディアの股間で、魔力を管理するオルガデバイスが限界超過の警告音を鳴り響かせた。

「……え？」

セシルが息を呑んだ。

魔導器の共鳴を介して流れ込んできた師の生体魔力情報は、あり得ない数値を示していた。

致死量を超える魔力の異常消費。

そして乱れた魔力の共鳴音の奥から微かに漏れ聞こえてくるのは、戦闘の爆音ではなく、蕩けるような甘い、完全な雌の喘ぎ声だった。

さらに洞窟の奥からは、血の匂いではなく、師が放つむせ返るような異常なフェロモンが濃密に押し寄せてきた。

「師匠……！？」

決して追うなという命令を破り、セシルは暗闇の奥へと駆け出した。

その背中を、パニックで顔を蒼白にさせたりディアがふらつく足取りで追う。

それが、彼女たち自身を最悪の運命へと引きずり込む1歩だとは知らずに。

## 魔物図鑑:リビドー・ドローン(体内侵食型スライム)



分類:体内侵食型スライム / 寄生・精神支配型魔法生物

起源:遠い昔、高度な文明を持った古き魔女たちが引き起こした大規模な魔法災害の痕跡から生まれたとされる、幻のスライムの亜種。過去の兵器暴走による環境汚染の産物とも推測される。

■ 形態と基本生態 肉体は無色透明で、ぬめりとしたゼリー状の流体として存在する。低級な粘菌などではなく、女性の「魂の魔力(オルガエネルギー)」を本能的に感知し、それを自らの栄養源および増殖のための熱量として徹底的に搾取する、極めて冷徹かつ合理的な自律型捕食者である。

■ 侵食と神経ハッキング機構(精神融合) この魔物は女性の体腔(膣、肛門、口腔など)から密やかに侵入し、魂の魔力生成に深く関わる中枢器官——とりわけ子宮や卵巣、性腺へ直接寄生することを目的とする。小型でありながら急速な浸潤能力を持ち、侵入後は標的の神経系や脳髓にまで深く干渉する。

物理的な寄生と同時に、魔力の奔流を強制的な快楽信号へと変換するハッキングを行い、宿主の思考や記憶を汚染して「誘惑」や「幻覚」を見せる。強力な魔力を誇る魔女であるほど、その膨大なエネルギーがそのまま強烈な快感のフィードバックとなって自身を襲うパラドックスが生じるため、気高い意志すらも快楽の泥沼に溶かされて容易く屈服していく。最終的に宿主は、自らスライムの増殖を助けるような自慰行為や淫靡な行動をとられ、精神と肉体が完全に一体化した「親体」へと作り変えられてしまう。

■ 繁殖プロセス(受胎と孵化) 子宮や最奥の聖域へと到達したスライムは、宿主の魂の魔力と生体エネルギーを貪欲に吸い上げながら、内壁に無数の「卵嚢(らんのう)」を形成し、植え付ける。この過程で宿主の下腹部は、まるで妊娠したかのように不気味に膨張していく。

卵嚢が成熟し「孵化」の時を迎えると、無数の小型リビドー・ドローンが胎内から湧き出し、宿主の内臓を食い破り、肉体を突き破って外部へと誕生する。この凄惨な出産は、宿主の肉体を内部から破裂させ、極限の苦痛と不可避の強制絶頂を同時にもたらす。そして、親体の魔力と肉体を最後の一滴まで吸い尽くした後に、新たなスライムの群れが外界へと放たれるのである。

■ 対策と制圧 体内への侵入を許せば、その救出は極めて困難となる。侵入直後であれば、高熱を帯びた魔術や特殊な溶解液を体腔に直接注入して内部から焼き尽くすか、強力な浄化魔法を用いて魔力構成を破壊し排出させる手段があるが、宿主の肉体にも激しい苦痛と危険を伴う。内部での増殖が進行しすぎた場合は、被害の拡大を防ぐため、宿主の命ごと魔力的な爆発等で肉体を破棄する最終手段が取られる。

---

作品名:お師匠様とあたしたちの、いけないスライム退治

発行日:2026年5月24日

発行者:XYZ\_L

連絡先:<https://bsky.app/profile/xyz0080.bsky.social>

### 【注意事項】

本作には強度の尊厳破壊、生体部品化、および救いのない結末などの過激な表現が含まれております。フィクションとしてお楽しみいただける方のみご閲覧ください。

### 【AI生成技術の利用について】

本作の表紙および挿絵などの画像は、AI画像生成技術を利用して出力したものをベースに、加筆修正やレイアウト調整を行って作成しております。

### 【禁止事項】

本作のテキスト、画像を含む一部または全部の無断転載、複製、改変、Web上への無断アップロード(SNS、動画サイト、ファイル共有サイト等を含む)を固く禁じます。

---